

蘇りつつある浅川流域のホタル

(2001 年から 2025 年の 25 年間の調査結果)

報告：粕谷 和夫（八王子・日野カワセミ会）

1. 目的

ホタルやカエルが生息するような河川は野鳥や人の住む環境としても素晴らしい自然が息づいていることの証であり、そのような環境があちこちに再生されることに期待を込めてこの調査をやっている。ゲンジボタルは昭和 30 年代、八王子市内の中心部である浅川の浅川橋や暁橋あたりで観察されていたという話を当時八王子に住んでいた人たちから聞いたことがある。しかし、昭和 40 年代以降は市内中心部からすっかり姿を消してしまった。2001 年（平成 13）以降の私の調査でもゲンジボタルは浅川本支流の最上流部や丘陵地の源流部でしか観察されなくなっていた。

しかし、2010 年あたりから市内中心部に近い浅川支流の中流部でもゲンジボタルがちらほら観察されるようになってきた。ゲンジボタルの復活の要因として下水道の整備、自然を生かした河川改修の進行、市民のホタル復活へ思いの高まり、河川にツルヨシ等の草本植物の繁茂、などが考えられる。この調査は人口 50 万都市八王子市の浅川流域でホタルがどのように復活しつつあるかを諸要因との関連で明らかにすることを目的とする。

2. 調査場所と調査年次

この調査は 2001 年から始めたので 2025 年で 25 年目となった。2001 年から 2008 年は河川の上流部や丘陵地等で部分的に行い、このような場所ではゲンジボタルが生息していることを確認した。その後、八王子市内の浅川流域の 5 河川である北浅川、南浅川、川口川、城山川、湯殿川のどの川のどの場所でゲンジボタルが復活しているかを区間を設定して計画的にカウント調査を継続的行ったのは 2009 年からである。調査区域は下図（●）に示すとおりである（下図の元図は都南多摩西部建設事務所から提供を受けた）。なお、第 1 表は 2025 年の調査結果（総括表）であるが、この表に示す河川別調査区間は 2009 年から変わっていない。



3. 調査（カウント）方法

調査は粕谷が一人で行った。交通手段は自転車（2020 年から電動自転車に変更）を使用している。まず各調査コースの上流端に行き、そこを 19 時 30 分に下流に向かって出発し、堤防をゆっくり自転車で走り、点滅しているホタルを見つけたら自転車を止めて双眼鏡など使わずホタルの数を肉眼でカウントするという単純なもの。また橋では必ず止まって、橋の上から上流側、下流側を見渡して点滅するホタルを探し、記録する。河原には背の高い草や木が水面を覆っている所が多く、河原の全てが見える訳でないためホタルの見落としがかなりあることを前提としている。

カウントした結果の記録単位は「橋から橋」間とした。調査終了時はコースにより異なるが 22 時頃となる。調査は 1 年に 1 回しか実施していないので、調査日とその調査コースの最高出現日とは一致していない。

4. 数えたホタルの種別とカエル

八王子市で観察されるホタルは点滅間隔が 2 秒型（関西系）のゲンジボタルがかなり混じっているとされているが関東系、関西系の区別はせず、全てゲンジボタルとした。また、ヘイケボタルが出ればそれも記録した。カエルはカジカガエルが主体であり。カジカガエルの声が聞こえた場所を記録した。

5. 2025 年の結果

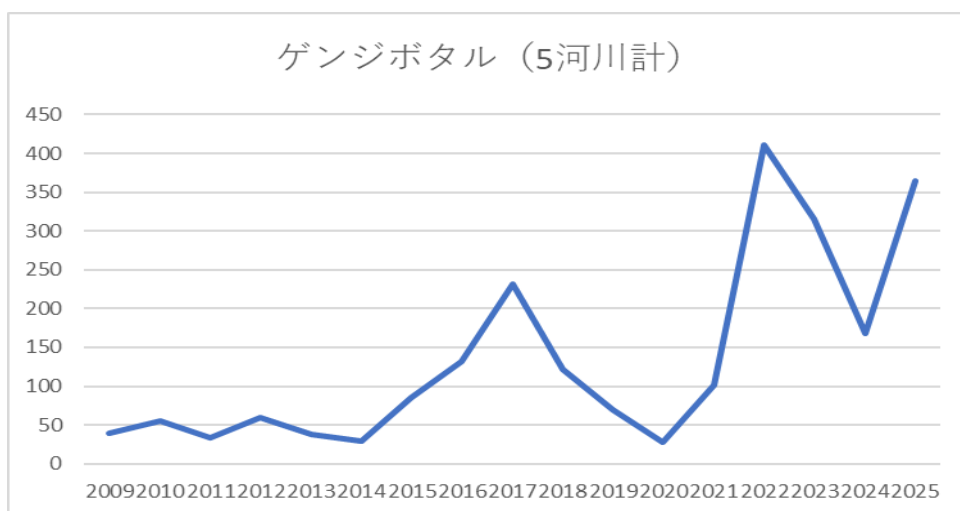
第 1 表は 2025 年の結果の総括表であり、6 月 16 日から 21 日の間に実施した。湯殿川が最も多く、川口川が最も少なかった。2024 年以前の総括表は省略するが、ほぼこの年と同じである。北浅川ではヘイケボタルも観察された。

(第1表) 2025年調査結果 (総括表)					
河川名	カウント区間	同左月日	観察者	ゲンジボタル計	ホタルがいた最下流区間
北浅川	陵北大橋～浅川橋	2025. 6. 18	粕谷和夫	26	中央高速道橋～鶴巻橋
南浅川	上櫛田橋～北浅川合流	2025. 6. 19	粕谷和夫	24	東横山橋～睦橋
川口川	田守橋～川口川橋	2025. 6. 21	粕谷和夫	21	駒形橋～唐犬橋
城山川	城山大橋～北浅川合流	2025. 6. 17	粕谷和夫	121	三村橋～五反田橋
山田川	月見橋～黄金橋	-		-	
湯殿川	湯島橋～住吉橋	2025. 6. 16	粕谷和夫	173	大橋～釜土橋
計				365	
北浅川	陵北大橋下流～浅川橋	2025. 6. 18	粕谷和夫	ヘイケボタル20	流れ橋下流側付近ワンド

6. 年次変化

第2表のとおり 2014 年までは少数しか記録されなかったが、2015 年頃からは年次変動はあるものの増加傾向を示し、2025 年は全体で 365 匹、2022 年の 411 匹に続いて多かった。

(第2表) 浅川水系中下流部におけるゲンジボタル成虫年代別カウント数																		
(カウント日は各年6月中下旬～7月上旬の任意の日で最盛期に一致しない時もある) 「一」は未調査																		
河川名	カウント区間	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
北浅川	陵北大橋～浅川橋	16	14	10	2	10	2	4	29	9	20	2	1	6	7	2	28	26
南浅川	上栢田橋～北浅川合流	3	35	6	3	20	7	56	96	96	40	2	1	1	9	15	32	24
川口川	田守橋～川口川橋	13	4	—	19	7	—	26	5	102	14	23	7	14	79	80	16	21
城山川	城山大橋～北浅川合流	5	2	17	20	1	0	—	2	20	13	4	2	1	41	67	26	121
山田川	月見橋～黄金橋	0	0	0	0	0	—	—	—	0	0	—	—	—	0	—	—	—
湯殿川	湯島橋～住吉橋	2	0	0	15	0	20	—	—	4	34	38	16	79	275	152	66	173
	計	39	55	33	59	38	29	86	132	231	121	69	27	101	411	316	168	365



7. 河川別、年次別の調査結果

第3表の1から5までのとおりであり、カウントした結果の記録単位は前記のとおり「橋から橋」間である。

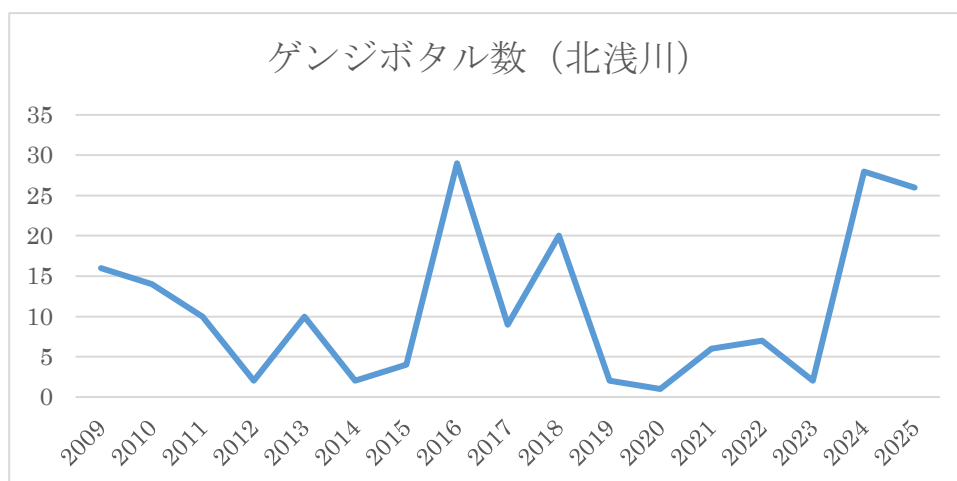
(1) 北浅川

北浅川は第3表-1のとおりであり、2016年にピークがありその後減少したが2024年か

ら復活した。この区間では流れ橋の上下流域から東京天使病院裏辺りでゲンジボタルが観察されている。最下流の確認地は鶴巻橋である。（注：流れ橋とは簡易歩道橋で仮称である）

(第3表-1) 北浅川の年次別ゲンジボタルカウント数(陵北大橋～浅川橋の橋間別) -は調査無し

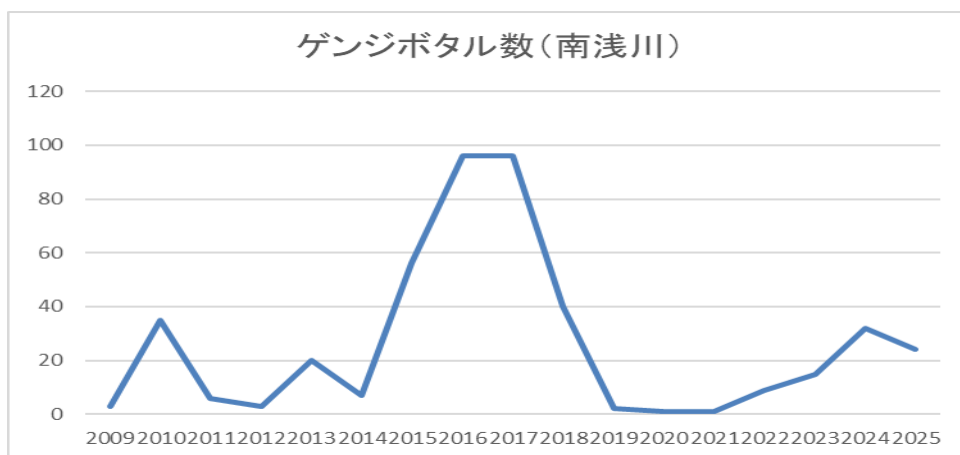
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
調査月/日	6/23	6/23	7/1	6/26	6/19	6/23	7/5	6/21	6/20	6/24	6/24	6/24	6/22	6/23	6/23	6/19	6/18
陵北大橋～流れ橋	7	5	5	1	2	2	2	5	3	5	0	0	1	0	0	15	7
流れ橋～天使病院裏の堰	3	3	5	1	5	0	1	7	5	10	2	0	5	5	0	10	5
天使病院裏の堰～松枝橋	3	4	0	0	1	0	0	17	1	2	0	0	0	1	1	1	5
松枝橋～中央高速道橋	2	0	0	0	2	0	1	0	0	3	0	0	0	0	1	1	7
中央高速道橋～鶴巻橋	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	2
鶴巻橋～萩原橋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
萩原橋～浅川橋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	16	14	10	2	10	2	4	29	9	20	2	1	6	7	2	28	26



（２） 南浅川

南浅川は第 3 表-2 のとおりであり、①両界橋から白山橋、②敷島橋付近と③南浅川橋から睦橋辺りの 3 区間がゲンジボタルが比較的多く観察される場所である。①両界橋から白山橋は 2017 年までは多く観察されたが 2018 年から急激に減少した。この原因は両界橋から白山橋間で大雨による大規模災害とその後の復旧工事によるもので 2025 年になってもホタルは復活していない。②敷島橋付近は 2018 年まではそれなりの数がカウントされたが、その後は急減した。その原因の一つとして樹木が伐採されて暗がりが無くなってしまったことによると思われる。③南浅川橋から睦橋辺り河流の両側にツルヨシが繁茂していて、これがゲンジボタルの生育環境に寄与していると思われる。最下流の確認地は横川橋から北浅川合流地である。

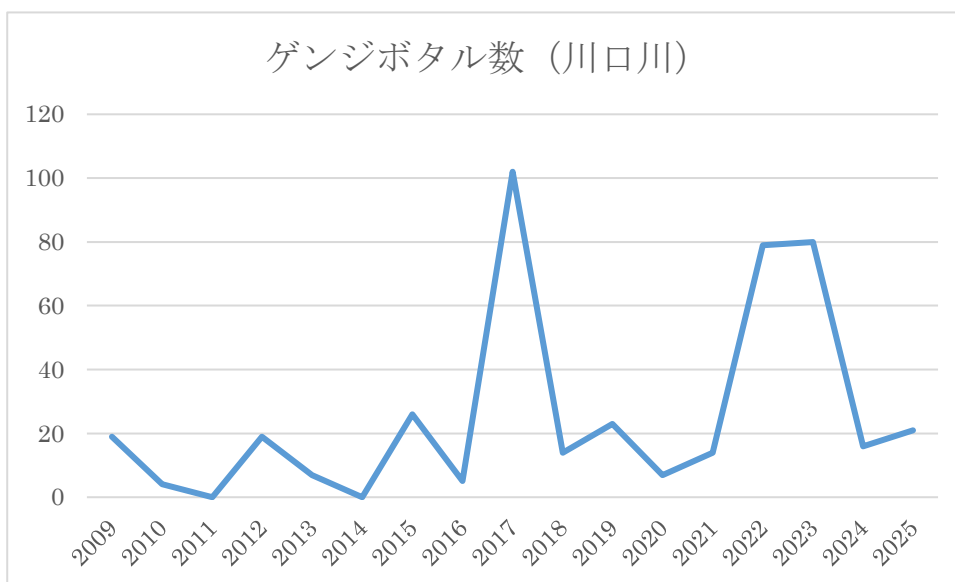
(第3表-2)南浅川の年次別ゲンジボタルカウント数(上栲田橋～北浅川合流地の橋間別) -は調査無し																		
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	
調査月/日	6/24	6/25	6/25	6/24	6/24	6/21	6/22	6/20	6/23	6/21	6/20	6/23	6/19	6/19	6/17	6/16	6/19	
上栲田橋～両界橋	0	2	0	0	0	4	6	3	0	5	2	0	0	0	0	2		
両界橋～白山橋	1	3	2	0	10	2	10	40	30	3	0	0	0	0	3	0	4	
白山橋～浅川支所歩道橋	1	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4	
浅川支所歩道橋～廿里橋	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	6	
廿里橋～敷島橋	0	10	3	0	3	1	13	20	30	20	0	0	0	0	0	2	0	
敷島橋～綾南大橋	0	0	0	1	0	0	5	0	0	5	0	0	0	2	0	0	0	
綾南大橋～古道橋	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
古道橋～南浅川橋	0	0	1	1	2	0	0	5	15	2	0	0	0	0	0	0	0	
南浅川橋～陵東橋	0	1	0	0	0	0	6	10	7	0	0	0	0	0	0	0	1	
陵東橋～横山橋	0	2	0	0	3	0	6	5	0	1	0	0	0	0	2	0	4	
横山橋～東横山橋	1	8	0	0	2	0	8	8	10	1	0	1	1	5	5	15	2	
東横山橋～睦橋	0	1	0	0	0	0	2	5	4	3	0	0	0	0	2	7	2	
睦橋～さつき橋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	
さつき橋～水無瀬橋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
水無瀬橋～横川橋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
横川橋～北浅川合流地	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
計	3	35	6	3	20	7	56	96	96	40	2	1	1	9	15	32	24	



(3) 川口川

川口川は第3表-3のとおりであり、2017年にはゲンジボタルが100を超えたがその後減少し、2022、2023年に復活した。2017年には滝ノ沢橋で30観察できたが、何故かこの場所はこの年だけであった。このコースでは日向橋辺りがコンスタントに観察される場所であり、重忠橋から新関戸橋でも観察される。数は少ないが山王橋辺りが特異的に出現している。最下流の確認地は大正橋である。駒形橋～唐犬橋で2025年に1観察されているが、ここは2017年～2018年に河川改修が行われた場所であり、河川改修直後は生き物が住みづらいような味気ない感じであったが、2025年に工事終了後8年でゲンジボタル1が確認された。

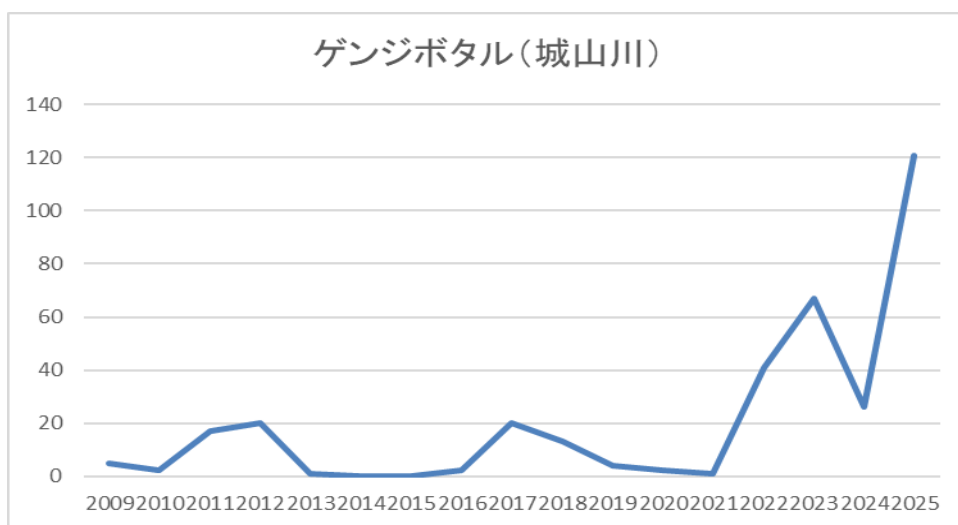
(第3表-3)川口川の年次別ゲンジボタルカウント数(田守橋～川口川橋の橋間別) -は調査無し																		
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	
調査月/日	6/27	7/3	—	6/30	6/29	—	6/27	6/25	6/19	6/22	6/17	6/20	6/21	6/17	6/16	6/24	6/21	
田守橋～明神橋	0	—	—	0	0	—	10	0	0	2	0	0	0	5	4	0	0	
明神橋～重忠橋	1	—	—	10	3	—	0	0	10	0	1	0	0	0	5	0	1	
重忠橋～下田守橋	7	—	—	0	0	—	0	3	0	0	0	0	3	20	14	0	0	
下田守橋～新関戸橋	0	—	—	0	0	—	5	0	5	0	5	0	2	5	13	3	0	
新関戸橋～関戸橋	0	—	—	0	0	—	0	0	0	0	0	1	0	3	0	0	0	
関戸橋～上川橋	0	—	—	0	0	—	0	0	10	0	0	0	0	2	0	0	1	
上川橋～日向橋	0	—	—	0	3	—	10	2	30	0	7	0	0	15	8	1	1	
日向橋～釜の沢橋	2	—	—	6	1	—	0	0	5	7	6	3	4	15	19	5	4	
釜の沢橋～幻鏡橋	0	—	—	2	0	—	0	0	0	0	4	0	0	10	4	0	6	
幻鏡橋～東釜の沢橋	0	3	—	0	0	—	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2	
東釜の沢橋～十内入橋	0	0	—	0	0	—	0	0	0	0	0	1	0	2	8	7	2	
十内入橋～圏央道橋	4	0	—	0	0	—	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	
圏央道橋～滝の沢橋	0	0	—	0	0	—	0	0	30	3	0	0	1	1	0	0	0	
滝の沢橋～西田橋	0	1	—	0	0	—	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	1	
西田橋～川口橋	0	0	—	0	0	—	1	0	5	0	0	0	0	0	1	0	0	
川口橋～片井戸橋	0	0	—	0	0	—	—	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
片井戸橋～観音橋	0	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
観音橋～川中新橋	1	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
川中新橋～宮田橋	0	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
宮田橋～山王橋	2	0	—	0	0	—	—	0	0	1	0	0	4	1	0	0	0	
山王橋～堀口橋	0	0	—	0	0	—	—	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
堀口橋～駒形橋	1	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	
駒形橋～唐犬橋	0	0	—	1	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
唐犬橋～高尾橋	0	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
高尾橋～大正橋	1	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大正橋～川口川橋	0	0	—	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	19	4	—	19	7	—	26	5	102	14	23	7	14	79	80	16	21	



（４） 城山川

城山川は第 3 表-4 のとおりであり、2022 年から増加し、2025 年は 120 を超えた。このコースでは不動橋辺り、次いで月夜峯新橋辺りがコンスタントにゲンジボタルが観察される。出羽橋の上流側は河川改修後に復活した兆しが見える。この場所で 2023 年に 60 がカウントされたが、この日は地元主催のホタル祭りが行われていた。最下流の確認地は五反田橋である。

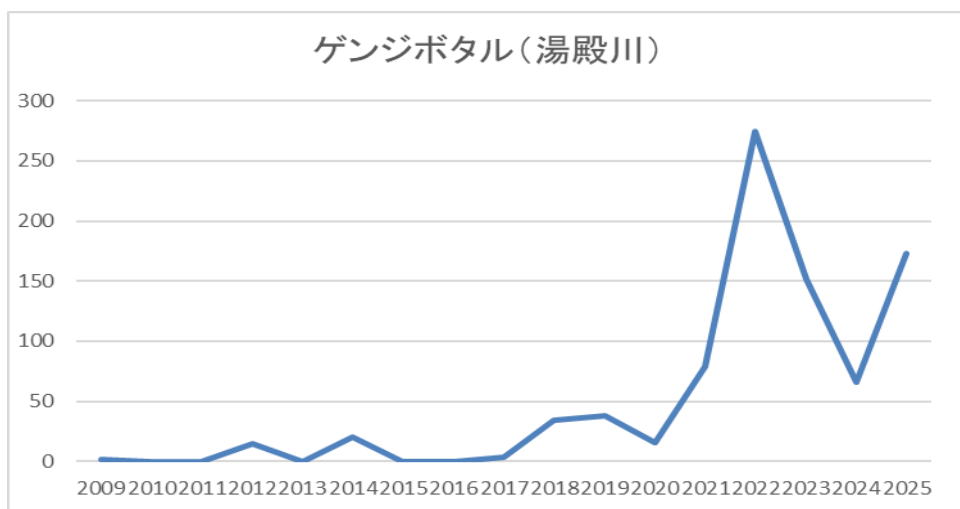
(第3表-4) 城山川の年次別ゲンジボタルカウント数(城山大橋～北浅川合流地の橋間別) -は調査無し																	
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
調査月/日	6/29	6/30	6/27	6/29	6/27	—	—	7/1	6/24	6/25	6/25	6/26	6/25	6/20	6/25	6/20	6/17
城山大橋～出羽橋	2	2	17	14	0	—	—	0	3	1	0	0	0	5	60	5	10
出羽橋～稲荷橋	0	0	0	0	0	—	—	0	0	1	0	0	0	5	1	5	9
稲荷橋～中央高速道橋	0	0	0	0	0	—	—	0	0	2	0	0	0	7	3	3	7
中央高速道橋～関戸中橋	0	0	0	0	0	—	—	0	2	0	2	1	0	2	0	3	1
関戸中橋～月夜峯新橋	0	0	0	0	0	—	—	2	1	1	0	0	0	12	1	0	30
月夜峯新橋～関戸橋	1	0	0	0	0	—	—	0	0	0	1	0	0	0	0	0	8
関戸橋～不動橋	0	0	0	6	1	—	—	0	3	5	0	0	0	2	0	8	40
不動橋～しんどう橋	0	0	0	0	0	—	—	0	1	0	1	0	1	5	1	1	11
しんどう橋～上横川橋	0	0	0	0	0	—	—	0	2	1	0	0	0	0	1	0	1
上横川橋～滝原大橋	0	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
滝原大橋～滝原新橋	1	0	0	0	0	—	—	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0
滝原新橋～樗橋	0	0	0	0	0	—	—	0	2	1	0	0	0	3	0	1	3
樗橋～中央高速道橋	0	0	0	0	0	—	—	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
中央高速道橋～三村橋	1	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
三村橋～五反田橋	0	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
五反田橋～北浅川合流地	0	0	0	0	0	—	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	5	2	17	20	1	—	—	2	20	13	4	2	1	41	67	26	121



(5) 湯殿川

湯殿川は第3表-5のとおりであり、2018年から増加し2022年には200を超えた。新田中橋から梶田橋が特に多い場所であり、河流の両側にツルヨシが繁茂していて、これがゲンジボタルの生育環境に寄与していると思われる。地蔵橋から西明神橋辺りは2011年～2014年に河川改修(護岸工)が行われた場所であるが、工事の影響は殆んど感じられない。

(第3表-5) 湯殿川の年次別ゲンジボタルカウント数(湯島橋～住吉間の橋間別) -は調査無し																	
	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
調査月/日	6/26	7/5	7/6	6/27	6/25	6/12	-	-	6/25	6/19	6/18	6/21	6/15	6/15	6/13	6/17	6/16
湯島橋～名称不詳橋	0	0	0	5	-	-	-	-	0	0	0	0	0	5	3	0	0
名称不詳橋～地藏橋	0	0	0	10	-	-	-	-	2	0	2	0	9	15	4	7	5
地藏橋～西明神橋	2	0	0	0	-	20	-	-	2	20	12	5	16	25	38	20	20
西明神橋～明神橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	1	0	2	20	8	0	6
明神橋～四谷橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	1	2	5	3	0	9
四谷橋～東橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	0	0	10	4	0	7
東橋～和合橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	0	2	10	11	3	6
和合橋～新関橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	3	3	2	15	15	1	15
新関橋～新田中橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	0	2	4	15	3	1	8
新田中橋～田中橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	5	5	3	10	40	19	10	25
田中橋～さかい橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	2	2	10	15	3	3	9
さかい橋～櫛橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	7	10	0	22	90	35	20	48
櫛橋～船橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	1	0	0	5	0	1	6
船橋～白旗橋	0	0	0	0	-	-	-	-	0	0	2	0	0	5	4	0	5
白旗橋～大橋	0	0	0	0	0	-	-	-	0	2	0	0	0	0	1	0	1
大橋～釜土橋	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	3
釜土橋～殿田橋	0	0	0	0	0	-	-	-	0	0	0	0	0	0	1	0	0
殿田橋～住吉橋	0	0	0	0	0	0	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	2	0	0	15	0	20	-	-	4	34	38	16	79	275	152	66	173

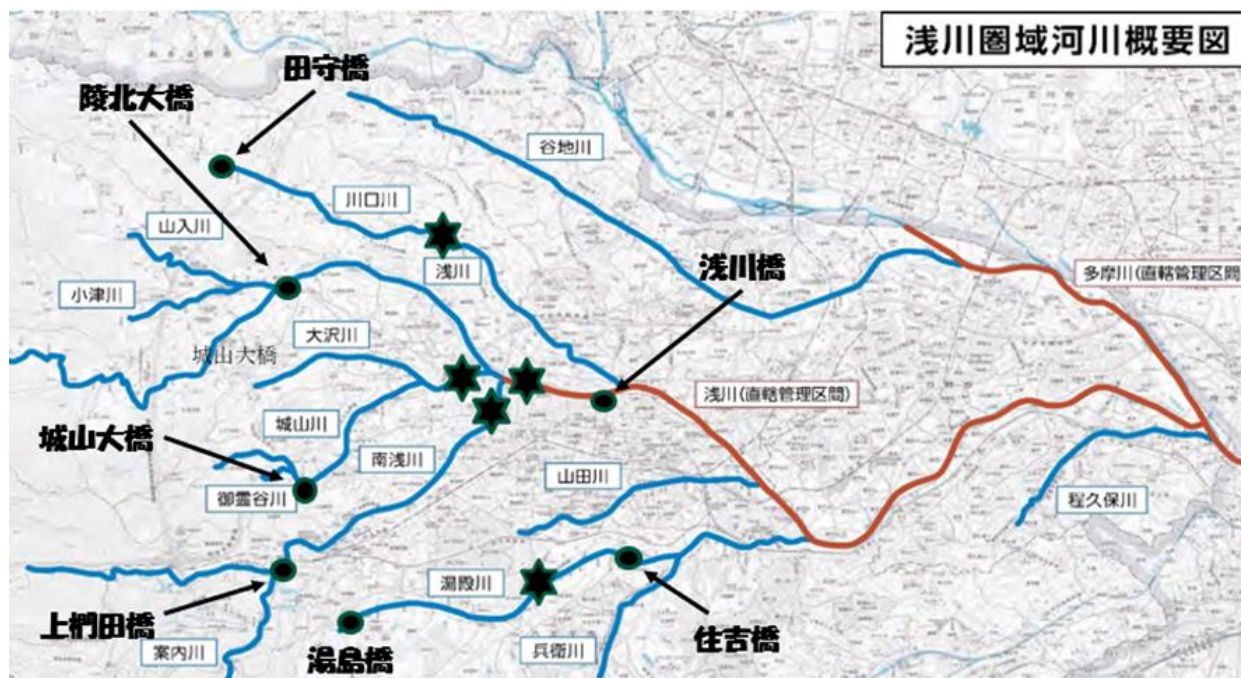


8. ゲンジボタルは下流域で復活しつつある

各河川別の 2025 年までにゲンジボタルが確認された最下流区間は第 4 表及び下図(★印地点)のとおりであるが、数はごくわずかであり、一度確認されても翌年以降は未確認になったりして、まだ定着はしていない状況である。しかし、下流域にも復活しつつあることはこの調査で明らかになった(下図の元図は都南多摩西部建設事務所から提供を受けた)。

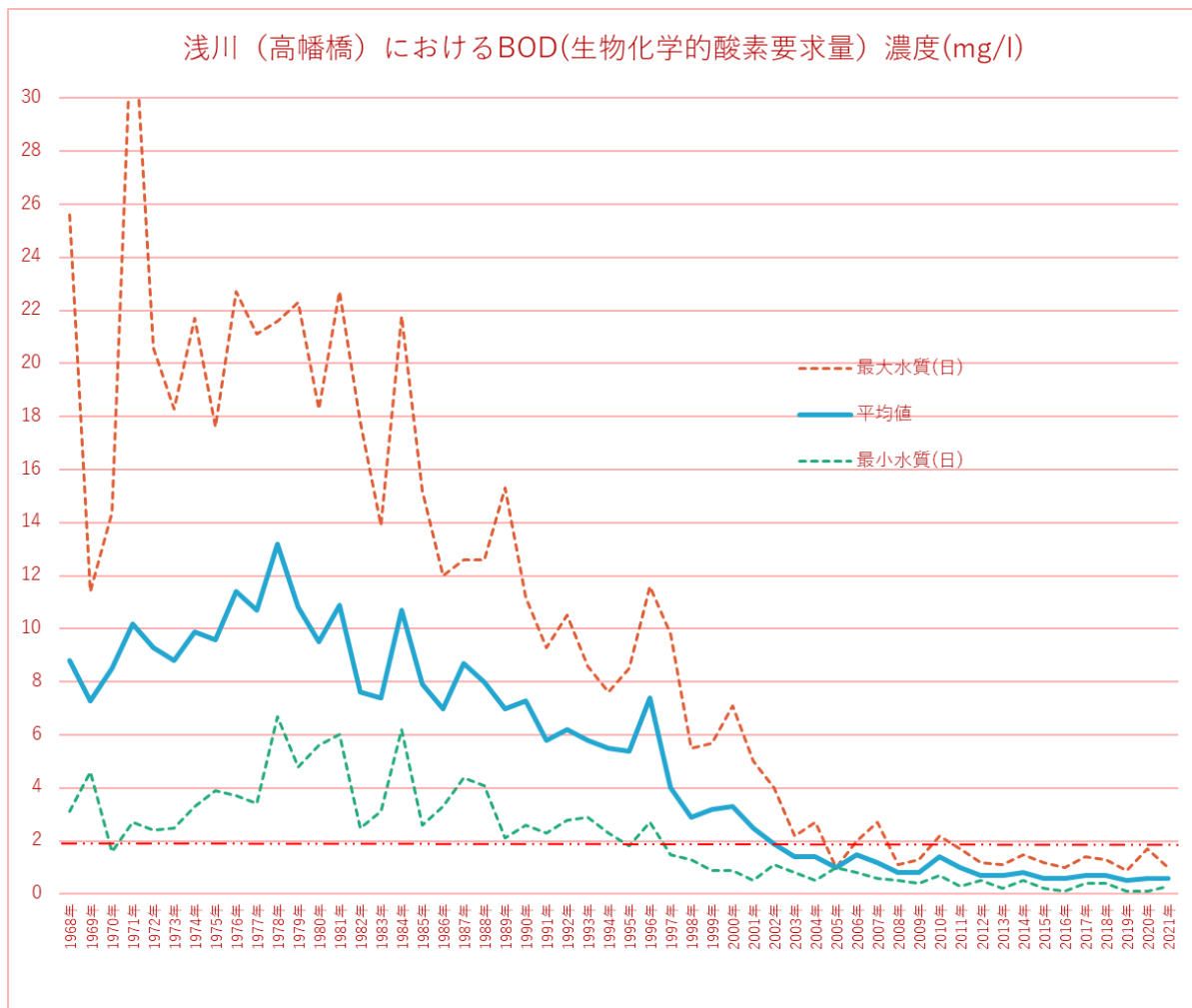
(第4表) ゲンジボタルがいた最下流区間

河川名	カウント区間	ゲンジボタルがいた最下流区間
北浅川	陵北大橋～浅川橋	中央高速道橋～鶴巻橋
南浅川	上櫛田橋～北浅川合流	横川橋～北浅川合流地
川口川	田守橋～川口川橋	高尾橋～大正橋
城山川	城山大橋～北浅川合流	三村橋～五反田橋
湯殿川	湯島橋～住吉橋	釜土橋～殿田橋



9. 河川の水質の年次変化との関係

浅川では主に 1960 年以前から家庭雑排水等の流入により、BOD（生物化学的酸素要求量）で示される有機汚濁が 1978 年頃をピークに BOD が平均 12mg/l 程度まで悪化した。その後、下水道の普及により 1995 年以降は水質が改善され、特に浅川流域の下水道普及率が 100% となった 2007 年以降はかなり改善され、A 類型の環境基準を達成している。現在、浅川の水質は BOD1mg/l 以下と奥多摩溪谷レベルの清浄さとなっている。下図は国土交通省水文水質データベースのデータから作成したもので、観察地点の浅川（高幡橋）は八王子の中心の浅川橋から約 10 km 下流側にある。「6. 年次変化で、浅川のゲンジボタルが 2015 年頃から増加傾向になった」と記したが、これは浅川流域の下水道普及率が 100% となった 2007 年から。8 年経過後である。



10. ワンドにはヘイケボタルもいる

ヘイケボタルは、主に水田や池などの止水域に生息している。川にもワンド（湾処）という止水域が部分的にある。北秋川の陵北大橋の下流にある「流れ橋～天使病院裏の堰」間のワンドには以前からヘイケボタルの発生が確認されていた。2025 年も約 20 匹が狭いワンドで飛びかっていた。

11. カジカガエルの調査結果

カジカガエルは、日本の清流に生息する美しい鳴き声を持つカエル。その鳴き声から「清流の歌姫」とも称される。「フィーフィフィフィ…」の音が「声多数、声有り、声無し」の 3 段階で評価した。第 4 表は 2025 年の城山川の結果で、ゲンジボタルの出る所とカジカガエルが生息している所がほぼ重なっていることが明確である。

（第4表）2025年城山川カジカガエルの声を聞いた場所		
2025. 6. 17 調査	カジカガエル	ゲンジボタル
城山大橋～出羽橋	声多数	10
出羽橋～稲荷橋	声無し	9
稲荷橋～中央高速道橋	声有り	7
中央高速道橋～関戸中橋	声無し	1
関戸中橋～月夜峯新橋	声有り	30
月夜峯新橋～関戸橋	声有り	8
関戸橋～不動橋	声有り	40
不動橋～しんどう橋	声無し	11
しんどう橋～上横川橋	声有り	1
上横川橋～滝原大橋	声有り	
滝原大橋～滝原新橋	声有り	
滝原新橋～樺橋	声有り	3
樺橋～中央高速道橋	声無し	
中央高速道橋～三村橋	声無し	
三村橋～五反田橋	声無し	1
五反田橋～北浅川合流地	声無し	
計		121

12. 終わりに

（1）ゲンジボタル復活の要因

2001 年から始めたこの調査の 25 年間の結果をまとめてみた。八王子市内を流れる浅川

支流 5 河川の中流地域ではゲンジボタルは 2014 年までは少数しか記録されなかったが、2015 年頃からは年次変動はあるものの増加傾向を示してきたことが毎年ホタルの数をカウントするという地道な活動によって明らかになった。

その要因として考えられることの一つは下水道の整備により家庭雑排水や工場排水が河川に直接流れ込まなくなったことが上げられる。

次にあげられる要因は河川改修との関係である。1997 年に河川法が改正され、従来のコンクリート主体の工事から河川生態系や植生の保護・育成が河川管理の目的に加わり、この改正を受けて「多自然川づくり」が進められるようになった。浅川水系でも東京都が治水上の安全確保と良好な河川環境を形成するためには、都民と行政が共通認識に基づき、協働・連携して川づくりを進めていくことを目的に、公募による河川流域住民、流域に関心を持ち活動している団体と流域自治体、河川管理者が河川に係わる情報や意見交換及び提案等を行うことの場合として、「浅川流域連絡会」が開催されるようになった。

（２）モニタリングの重要性

自然環境の保全のためには、まず現状を把握することを目的に科学的かつ客観的なデータを収集し、これを長年継続することが重要である。そのために地域の市民がボランティアで調査に関わる意義が大きい。得られた基礎情報は、地域における生物多様性の保全活動を推進する行政、各種研究や技術開発に寄与するはずである。浅川 5 河川のホタル調査は今までは 1 人でやってきたため、物理的に 1 年に 1 回しか実施していないので、調査日とその調査地の最高出現日とは一致していないという欠点がある。今後はこの調査を継続、拡大してくれる仲間が増えてきてくれることを切に望んでいる。

（３）自然発生するホタルが舞う八王子の実現を

八王子のような人口 50 万以上の都市で人工的に飼育されたホタルではなく、また他地域から捕まえてきたホタルを放虫するのではない天然のホタルが町中で鑑賞できるようになるのが夢でなくなってきたような気がする。

日本人にとって、ホタルは四季を彩る大切な風物詩であった。八王子の中心地までは未だホタルは復活してないが、兆しは見えてきたような期待が膨らんできた。ホタルが舞う時期に、環境を考えるイベントとして浅川本支流の各地でホタル祭りが開催できるようになることを期待している。そのためには下流域でホタルが生きられるような「川作り」をもっと真剣に考え、実行に移す必要を痛感する。

（４）謝辞

この調査を進めるにあたり、ホタル研究家の小俣軍平氏から貴重な助言と励ましをいただいていることに感謝する。また、調査結果の取りまとめに当たり、浅川流域 5 河川の過去の河川改修事業の経過資料を東京都南多摩西部建設事務所から提供頂いたこと、NPO 東京生物多様性センターの渡辺仁氏から「国土交通省水文水質データベースのデータから作成した浅川(高幡橋)における BOD の変化のグラフ」の提供をいただいたことに感謝する。

粕谷 和夫様の報告を読んで

小俣軍平

この度は、会員の皆様方よくご存知の粕谷和夫様に、月報への御寄稿をいただきました。粕谷様は野鳥の研究がご専門で、東京都の三多摩地域を中心に「八王子・日野かわせみ会」という研究団体の代表です。野鳥の研究・保護活動の傍らで、八王子市浅川流域のゲンジボタルについてもその発生状況を長年にわたり調査し、「八王子・日野かわせみ会」の機関紙に発表しておられます。私達は、板当沢時代から25年間にわたり大変お世話になってきました。そこで、この度あらためてお願いし、25年間の調査・研究結果をまとめて報告していただきました。

粕谷様のゲンジボタルの羽化状況の調査は大変ユニークなもので、夜間に自転車に乗り、一人で発生地を回ります。これは、かつて1960年代に東京都三多摩地域が大気汚染に見舞われ、PH3.4という硫酸のような雨が降って大問題になったことに関係しているようです。オートバイや車を使うのが普通ですが、走行に当たり、排気ガスを排出します。排気ガスによる大気汚染は、人間ばかりでなく生物全体の問題です。そこで、粕谷様は自転車で…というわけです。

調査を始めた時の御年齢は60代でしたが現在は80歳代、それでも粕谷様は、排気ガスの無い自転車を使っています。頭が下がります。私は板当沢時代に、クロマドボタルの調査で全国をまわりましたが、粕谷様のような調査の方法は聞いたことも見たこともありません。会員の皆様方、これだけ徹底して大気汚染の問題に取り組んでいる方がおられましたら是非教えて下さい。

さらにもう一つ、東京都下でこの半世紀にわたる多摩丘陵での都市開発による自然環境の激変は、日本の戦後の歴史の中でも特別なものであったと思います。その変化の状況とゲンジボタルの河川による羽化状況を、25年という長期間にわたって記録してきたということは、ゲンジボタルの保護・保全問題について、これまで誰も取り組んだことの無い手段になると思います。本当に素晴らしいことです。

あとがき

暦の上では酷暑の夏が終わり秋になっても、日中の気温が下がらず夏の状態が続いていましたが、やっと秋らしくなったと思えば、もう11月が終わりです。ここ数年の日本列島の季節の変化をみていますと、春と秋が短くなり、夏と冬が長くなりました。そのためか我が家の庭先に見られる生物もこのところ様変わりしています。

私の家は多摩丘陵を60年前に京王帝都電鉄が開発した住宅地にあり、家を建てて50年が経過しました。そしてつい5年程前までは庭先にいろいろな生物が姿を見せてくれていました。その中でも特出していたのは、夏のあいだ見られたヒキガエルです。

ヒキガエルは、住宅地では庭に池が無ければ生息できません。ところが私の所ばかりでなくご近所の100軒ほどをみても、庭に池のある家はありません。しかし数は1匹だけですが、毎年夏になると庭先の植木の下に正座していました。さらに驚いたことに、親のヒキガエルばかりでなく、足が生えたばかりの小さなヒキガエルが庭先のつつじの下あたりに鎮座してみられました。ご近所の方々にお聞きしてみると、皆さん共「うちの庭先に

もヒキガエルがいますよ」と言われていました。しかし、このところ3年連続で、その姿が見られなくなりました。

また、アオギリ・チャボヒバ・ウメ・コブシ・ツバキ・マツなどには、夏になると5種類くらいのセミが羽化して、にぎやかに鳴き声をきかせてくれていました。サンショの木にはアゲハの幼虫が複数見られました。しかし最近、セミはアブラゼミだけを残して他はすべて姿を消しました。蝶の幼虫も見られなくなりました。

我が家の庭先にも「沈黙の春」が音もなく近づいています。個人ではどうにもならない問題ですが・・・・・・・・。